
第3回歴博国際シンポジウム

東アジアにおける農耕社会の形成と文明への道

The 3rd REKIHAKU International Symposium of the National Museum of Japanese History:
The Formation of Agricultural Societies and Civilization in East Asia

春成秀爾

HARUNARI, Hideji

[Organizer Address] The formation of agricultural societies in Japan is one of the important issues for the study of Japanese cultural history. However, the interests of Japanese archaeologists have mainly focused on the identification of the core area of rice cultivation and its diffusion route to Japanese archipelago. These previous researches have been very particularistic and fail to present comparable perspectives with those in other regions. This symposium, "the formation of agricultural societies and civilization on East Asia" aims to establish common grounds between Japanese archaeologists and researchers in various parts of the world to discuss these important themes.

The first session, "the formation processes of agricultural societies", examines the beginning of cereal cultivation and associated social change. Geographic scope will cover Europe, West Asia, China, Korea, and Japan. The discussion will center on the comparison between food-producers and hunter-gatherers. The second and third session, "urbanization and state formation", deals with urbanization specifically in Chinese cases. We will discuss cities, states, and ideological changes associated urbanization in East Asia and compare the Chinese examples with Japanese Jomon, Yayoi, and Kofun cultures.

The topics raised in this symposium are all vital and universal issues in archaeology: We hope this symposium will present new perspectives in the study of agricultural societies in East Asia.

1. はじめに

1999（平成11）年度の第3回国立歴史民俗博物館COE国際シンポジウムは、「東アジアにおける農耕社会の形成と文明への道」をテーマにして、2000年1月31日から2月4日の5日間にわたって、国立歴史民俗博物館を会場にして開催した。

国立歴史民俗博物館国際シンポジウムは、文部科学省が推進するCOE中核的研究機関支援プログラムの一つとして開催計画を立案し、それが採択されることによって実現される。その一方、1998年から3年間の予定で始めた国立歴史民俗博物館の共同研究「東アジアにおける農耕文化の成立と拡散」の成果を、私たちは2000年度以降に学界に問う予定であった。共同研究の目的は、東アジアでは採集・狩猟経済から農耕経済への移行はいかなる自然的・歴史的条件のもとで実現したのか、そして農耕社会の成立から、都市の成立をうながし、文明への道を歩むようになった要因はどこにあったのかを、地域ごとに追究するということにおいていた。

しかしながら、館内の事情で共同研究の2年目に急遽、国際シンポジウムという形態で中間段階

の研究成果を報告することを要請された。そこで、共同研究と併行してシンポジウム開催の準備を進め、その年度の終わりに公表することになった。そのために共同研究のメンバーにとっては、共同研究の成果を公表するというよりも、それまでの各人の個人研究の成果を先行して発表する形になってしまったことは否めない。なお、東アジアだけでなく西アジアさらにはヨーロッパまで視野にいたれたこのような大型のシンポジウムを実質4日間にわたって開催するには、共同研究のメンバーだけでは十分でないことが明らかであったので、メンバーと相談のうえ、外部の方々にも参加を求めることになった。その結果、発表者は共同研究のメンバー13名、外部15名の計28名になった。

本報告書は、シンポジウム当日の発表内容にその後の研究成果も含めることは自由という形をとって、原稿を集めた。また、発表者でなかったが共同研究のメンバーで寄稿したウェルナー・シュタインハウス氏の論文も収録した。なお、期日までに間に合わなかった方のばあいは、当日の発表要旨を収録してシンポジウムの全体内容を記録しておくことにしたので、合計29篇の論文からなる報告書を刊行することになった。なお、張弛、趙輝、孫華氏の中国語論文については小柳美樹氏に、袁靖氏の中国語論文については三宅俊彦氏に日本語に訳してもらった。

2 目的と意義

日本で最初に農耕社会が成立した弥生時代の始まりを取り上げたこれまでの国際シンポジウムで、海外の研究者に求めてきたのは、稲作の起源地や日本列島へと至る稲作の伝播ルートの追究など、日本側の関心に基づく問題設定が多かった。そこで今回は、農耕が最初に始まった東西の起源地である中国と西南アジアから、日本列島へと至る東方ルートと北西ヨーロッパへと至る西方ルートの二つを構造的に捉え、生態・歴史的な環境の違いを乗り越えた普遍性を探ることによって、東アジアの農耕の開始と、それを生産基盤に古代化していく過程を都市化と文明化と捉え、世界に向けて問題提起することを目的とした。

日本考古学の国際化は、研究の現状や列島内の諸文化の様相を、単に海外に紹介することではない。弥生時代の研究も、新たな視点と方法を用いれば、世界の考古学においてより普遍化した研究となりうるし、またそれが日本人研究者の責務でもある。今回設定したテーマは、いずれも縄文・弥生時代を研究する上で、重要な課題であるだけでなく、国内外の研究者が一同に会して、共通の問題意識として議論することが可能である。当シンポジウムは、今後東アジアにおける、初期農耕文化の研究をリードする、新たな展望を見いだすことを目標にして開催した。

3 シンポジウムの構成

これまでのシンポジウムでは、中国、韓国といった地域ごとに個別発表をおこなうことが多かったので、今回はまずテーマごとにセッションをつくり、その中で各地の状況をみていくという方法をとった。事務局が最初に用意したテーマは、「農耕文化再考」と「激動の東アジア」の2つであった。

「農耕文化再考」では、「なぜ、どのように栽培に傾斜したか」というキーワードで、これまでの「いつ」、「どこで」という起源問題や伝播論から一定の距離をおいた議論をめざそうと考えた。

「激動の東アジア」では、中国で農耕社会が成立し、都市が生まれ、古代国家が成立するという

文明化をうけて、周辺地域の文明化がどのように進んでいくのか、各地域と周辺地域という構図で議論をおこそうと考えた。

この案にたいして、技術的側面や社会的側面から切り込んでいく方法は従来通りでよいとしても、今回は宗教・祭りなどから世界観やイデオロギーといった側面からこれらの問題に迫る必要があるのではないかとの問題提起があった。これまでの考古学のシンポジウムではあまり取りあげてこなかった側面である。

たとえば縄文時代から弥生時代への移行の問題を議論するさいに、イギリスの考古学の影響をうけて、イデオロギー的な側面を重視する傾向がでてきている。都市が成立する問題を論じるさいも、「神殿」の存在が重視されている。

このような議論をへて設定したのが今回の「農耕社会の形成」、「文明への道—都市と戦争—」、「文明への道—世界観・国家—」の3テーマである。そして、「東アジアにおける農耕社会の形成と文明への道」の特性を明らかにしテーマを深めるには、西洋社会と東洋社会を対置してみることが可能になるような発表者を選ぶことが求められた。

なお、セッションとは別にテーマ全体にわたる共通理解を得るために第1日に基調講演を2つ用意することにした。

4 シンポジウムの進行

シンポジウムの日程は、第1日を基調講演、第2日、第3日をセッション2（座長、甲元眞之・常木見）・セッション3（座長、宇野隆夫・中村慎一）にあて、第4日を千葉県内の遺跡・博物館見学にして、第5日をセッション3（座長、後藤直・広瀬和雄）にあてた。基調講演は各1時間、研究発表は各40分（質疑5分を含む）で、1日ごとに各セッションの総括を座長がおこない、第5日に3つあわせた総合討論をおこなった。

なお、第1日の夜6時から、佐倉市ユーカーが丘のウィシュトン・ホテルでレセプションをもち、内外多数の参加者を得て、学問的議論に花を咲かせ、情報交換につとめるなど、友好関係を深めるよい機会となった。

シンポジウムの日程と各セッションの構成は次のとおりである。

第1日 2000年1月31日(月)

歓迎のあいさつ 佐原 真（国立歴史民俗博物館）

主催者あいさつ 春成秀爾（国立歴史民俗博物館）

基調講演 東アジアにおける農耕社会の形成と文明化

「東アジアにおける農耕の起源と拡散」 甲元眞之（熊本大学文学部）

「東アジアからみた弥生時代の青銅器文化」 春成秀爾（国立歴史民俗博物館）

第2日 2月1日(火)

セッション1 農耕社会の形成（座長 甲元眞之・常木 見）

「黄河流域における農耕の起源：現象と仮説」 陳 星燦（中国・中国社会科学院）

「中国先史農耕・経済の発展と文明の起源について—黄河・長江中下流域を中心として」

張 弛（中国・北京大学）

-
- 「中国古代農耕社会における家畜の問題について」 袁 靖 (中国・中国社会科学院)
「極東ロシアと中国周縁部における初期農耕社会の起源」
セルゲイ・V・アルキン (ロシア・ノヴォシビルスク州立大学)
「韓国における農耕社会の成立」 安 在皓 (韓国・東國大学校)
「日本における稲作と水稲農耕の始まり」 藤尾慎一郎 (国立歴史民俗博物館)
「西アジアにおける農耕の始まりとその要件」 常木 晃 (筑波大学歴史・人類系)
「西アジア型農耕の西方展開」 三宅 裕 (筑波大学歴史・人類系)
「ギリシア半島の初期農耕社会」 コスタス・コチャーキス (ギリシア・テッサロニキ大学)

第3日 2月2日(休)

セッション2 文明への道—都市— (座長 宇野隆夫・中村慎一)

- 「中原世界の形成」 趙 輝 (中国・北京大学)
「中国における都市の生成」 中村慎一 (金沢大学人文学部)
「華南からみた農耕社会と都市の成立」 西谷 大 (国立歴史民俗博物館)
「韓半島の文明化」 崔 夢龍 (韓国・ソウル大学)
「東南アジアの文明化前史—メコン流域の場合」 新田栄治 (鹿児島大学法文学部)
「日本の文明化」 広瀬和雄 (奈良女子大学大学院人間文化研究科)
「メソポタミアの初期複合社会—最近の研究成果と派生する問題」
グレン・M・シュワルツ (アメリカ・ジョーンズ・ホプキンス大学)
「エトルリアにおける国家形成」 サイモン・ストッダード (イギリス・ケンブリッジ大学)
「ブリテン鉄器時代と日本」 新納 泉 (岡山大学文学部)
「西洋と東洋の「都市」成立のプロセス—日英の比較を中心として」
宇野隆夫 (国際日本文化研究センター)

第4日 2月3日(休)

- 千葉県内の遺跡・博物館見学 (案内 設楽博己, 佐原 真, 古里節夫, 村田六郎太, 郷堀英司, 森 尚登)
松戸市立博物館 (常設展示, 『発掘された日本列島展』, 縄文復元住居)
加曾利貝塚博物館 (常設展示, 企画展『長崎県 貝塚の謎をさぐる』, 貝塚貝層断面)
房総風土記の丘 (岩屋古墳, 常設展示)

第5日 2月4日(金)

セッション3 文明への道—世界観・国家— (座長 後藤 直・広瀬和雄)

- 「東アジアの文明化—中国の場合」 量 博満 (上智大学文学部)
「中国初期国家の形成過程」 岡村秀典 (京都大学人文科学研究所)
「中国殷周社会の発展の道—中原青銅文化の伝統を形成した原因の角度から考察する」
孫 華 (中国・北京大学)
-

「韓国における農耕社会の儀礼と世界観」	李 相吉 (韓国・慶南大学校博物館)
「青銅儀礼具の日・韓の差異」	後藤 直 (東京大学文学部)
「弥生時代から古墳時代へ—日本列島の文明化をめぐる」	白石太一郎 (国立歴史民俗博物館)
「古代日本の世界観—天下・国・都城」	仁藤敦史 (国立歴史民俗博物館)
総括討議 (司会 中村慎一・常木 晃・宇野隆夫)	
開会のあいさつ	白石太一郎 (国立歴史民俗博物館)

5 成果の概要

「東アジアにおける農耕社会の形成と文明への道」を東アジアの内部からと外部から比較考古学の立場からみてその特性を明らかにするという趣旨である。

基調講演では、東アジアにおける農耕の起源について自然科学と考古学の双方から迫った視野の広い報告と、日本の青銅器文化の実体と特異性をとりあげ日本考古学の方法を示す報告があった。

セッション1「農耕社会の形成」では、中国・韓国・日本・ロシア・西アジア・ヨーロッパの場合を取り上げた。農耕がはじまって農耕が社会のシステムの中心になり、農耕社会を形成する地域とそうでない地域とが生じるメカニズムについて論及した。

セッション2と3では「文明への道」と題して現在、考古学の最先端部分での関心事である農耕社会・都市・国家の形成、世界観をテーマに取り上げた。中国・韓国・日本・西アジア・ヨーロッパで、それぞれどのような理論と資料でこれらの問題にアプローチしようとしているかが明らかになった。中国で当初は周辺よりも遅れていた中原が、周辺各地からすぐれた文化をとりいれて東アジアの文明の中心となっていくという発表などは、議論をよんだ。

今回は40代から50代半ばの若い研究者が主役のシンポジウムであった。日本の研究者は、遺



シンポジウム・セッション2の総括討議 (2000年2月20日)
(左から宇野, 中村, 崔, 西谷, 新田, 広瀬, シュワルツ, 趙, ストッダード, 新納)

跡・遺物の分析と理論の両面から課題に迫ろうとする日本の考古学の特徴と現段階での到達点とを海外の研究者によくアピールできたと思う。足元の日本考古学の充実と海外の考古学との連携と交流、一言にしていえば、比較考古学が21世紀の主流となることを参加者がひとしく痛感した国際シンポジウムであった。

日本語・中国語・英語の同時通訳は、きわめて効果的で評判はよかった。ただし、発表者のなかには専門用語を使って早口で述べる人がいて、通訳者がついていけないケースがあり、主催者としても経験不足を感じた。

考古学のシンポジウムは土・日の休日2日間を利用しておこなわれるのが常識であって、数百人の参加がごく普通にみられる。歴博シンポジウムは開催期間が月曜日から金曜日までの5日間であるので、それぞれ勤務をもつ研究者や一般の方々には参加しづらいという面があったように感じられた。

千葉県内の遺跡と博物館の見学は、適切な解説者を得て外国からの参加者には日本の考古学の水準や博物館の現状を実地に理解してもらうことができ、きわめて好評であった。

6 運営方法

国立歴史民俗博物館の共同研究「東アジアにおける農耕文化の成立と拡散」の2年目を本シンポジウムの準備にあてたので、運営はスムーズにおこなわれた。

各セッションごとにその分野の専門家2名をたて、企画・交渉から当日の座長まで担当してもらった。

登録研究者を広く募集し、シンポジウムの開催を広く広報するために、サーキュラー、ポスターを作成し、配布した。

ポスターは、本館第1展示室に掲示している農耕集落復原イラストを背景に、「なぜ農耕を始めたのか」というロゴを、日本語、中国語、韓国語、英語で配置する構図にした。

発表要旨集は、講演内容の理解を助ける図表を多く掲載した117ページの大部なものを用意した。使用言語は英語と日本語で、本文が英語の場合は要旨を日本語で、本文が日本語の場合は要旨を英語という形式にした。基調講演については10頁前後、発表は4頁前後で作成した。

公用語は日本語・中国語・英語とした。ただし、韓国語による発表も可とした。3つのセッションでは、それぞれの言語に他の3言語の同時通訳をおこなった。同時通訳は簡易同時通訳装置を使用し、(株)コングレに依頼した。事前に講演原稿を提出した講演についてはうまくいったものの、原稿のなかったものについては同時通訳の難しさを痛感させた。

実施にあたっては、実行委員会をつくってプログラム、発表要旨集、ポスター等の作成をおこなった。事務上の手続きなどは管理部庶務課共同利用係を窓口にして、庶務課と会計課が実務を担当した。さらに、研究委員会からの支援があった。

実行委員会 (○は代表、*は事務局担当)

○春成 秀爾 本館考古研究部

袁 靖 本館COE外国人研究員

*西谷 大 本館考古研究部

(中国社会科学院)

* 藤尾慎一郎 本館考古研究部 木村 有紀 本館COE非常勤研究員
 設楽 博己 本館考古研究部 マーク・ホール 本館外来研究員
 仁藤 敦史 本館歴史研究部 (カリフォルニア大学・バークレー校)

7 国際シンポジウム参加者数

参加者数	国内研究者			外国研究者			合計
	招待講演	一般参加	計	招待講演	一般参加	計	
	11人	148人	159人	11人	2人	13人	172人